

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:15.

「介護者役割緊張リスク状態」標準看護計画の見直し

石倉 かおり, 澤田 裕子, 久保 千夏, 舘川 香奈枝, 金田 豊
子

「介護者役割緊張リスク状態」標準看護計画の見直し

旭川医科大学病院 看護部 患者看護システム委員会
○石倉かおり 澤田裕子 久保千夏 舘川香奈枝 金田豊子

【はじめに】

急速な少子高齢化により地域包括システムの整備が進められている。急性期病院であるA病院においても65歳以上の入院患者が半数以上を占めており、また在院日数が短縮される中、より地域との連携が必要であり、病院における看護師の役割が変化、拡大している。A病院での「介護者役割緊張リスク状態」の年間診断数は、平成26年度の250件をピークに150件程度で推移している。なかには、患者状況や背景が診断概念や定義と合わず、看護診断名から予想されるイメージで診断したと思われる事例があった。そこで、看護診断の定義に合致した患者目標、看護介入となるよう看護診断別標準看護計画（以下、標準看護計画）を検討した。

【方法】

1. A病院の2015年10月から2016年9月の「介護者役割緊張リスク状態」の診断数と患者目標、看護介入の使用数、自由記載を抽出し検討した。
2. 文献をもとに患者目標、看護介入を検討した。
3. 診断概念の説明と標準看護計画の変更点を説明するためのセミナーを開催した。

【倫理的配慮】

対象が特定されないように配慮し、得られたデータは調査以外の目的に使用しない。

【結果】

診断数は143件だった。看護介入の自由記載には、医療処置の方法や予定、排泄や食事、清潔に関する手順といった情報が記載されていた。

社会学、看護に関する文献で「介護」、「役割」の理論的背景について検索し、在宅介護の知識や手技の習得や、毎日面会を希望する家族の身体的・精神的負担を危惧する状態を主に診断するのではないと理解した。定義に合った患者状態に必要な患者目標と看護介入が標準看護計画に登録されているか精査した。

患者目標は、介護者のストレス要因に関わる内容を中心に7項目を修正し、2項目を追加した。症状の悪化や重篤な状態の受容に関する患者目標や、退院後の医療処置についての知識獲得に関する患者目標30項目は、診断の定義に合致しないため削除した。看護介入は診断の危険因子と関連付けて検討し、レスパイトを促す1項目を修正し、介護者の支援に関わる内容とあわせて5項目を追加した。診断の定義が合致しない介入、重複する介入50項目を削除した。

セミナーには、病棟看護師を中心に139名が参加し、正しい定義、誤診断につながりやすい状況について理解を深めていた。一方で、事例による具体的な看護展開の紹介の希望や介護者役割緊張リスク状態を診断しない場合、他にどのような診断がよいか示してほしいという要望があった。

【考察】

看護診断の定義に照らし、患者目標と看護介入を検討した。また、セミナーを開催し、診断概念と標準看護計画の変更点を説明したことにより、看護診断の概念や定義の理解が深まり、看護診断名から予想されるイメージではなく、どのような対象に診断するか理解が深まったのではないかと考える。今後は活用状況についても調査する必要がある。